
花鳥風月～茜は夢の道標～

佐保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花鳥風月〜茜は夢の道標〜

【Nコード】

N3747BA

【作者名】

佐保

【あらすじ】

俺たちの姉ちゃんは元気で熊と戦えるくらいに強くて、誰よりも自慢できる姉だ。たとえ国の最重要人物である花冠の一員になったとしても、きっと姉ちゃんは姉ちゃんのままだろうなって。

そして俺たちは思うんだ、姉ちゃんの星の下って一体どうなっているのか、女神様に教えてもらいたって！俺たち一家巻き込んで、ジェットコースター真っ青の人生歩ませて、何か楽しいんですか！？そんな俺、長男の柚月から見た、姉ちゃんのささやかな話。

（花鳥風月シリーズの二つ目の話となります）

茜伯爵の即位式 01

肩を出した、美夜と陽花いわく茜色の「お姫様ドレス」は裾が長いもので、踏んづけたらどうしようかと迷うくらいの推定3m。

そして藤色の授を斜めにかけているのは、姉ちゃんが「秋津島公爵のもの」という意味があるらしい。

勿論、その授にぶら下がっている藤色のメダルの表は藤、裏は茜。

即位式の基本は、神官の祝福を受ける白をメインに両端は領地の色なのだとか。

領地を持たない皇都花冠は、全部白ということになる。

勿論メダルの色は華族で金、花族で銀に表が当代秋津島公の花紋、裏が自分の花紋。

姉ちゃんは本当に特殊だと、あからさまにわかる仕組みになっている。

左右の側頭部には翡翠色の茜の小さな花を握りこぶし大のブーケにしたものと真珠を三連にした髪飾りで短い髪をまとめ、首にも真珠をつけている姉ちゃんは、化粧のせいもあるかも知れないけど、とても綺麗だと思った。

前を向いて、けっして迷いも揺るぎもしない表情で、控え室では慣れないヒールの高さにぐらついてた素振りすら見せずに、ゆっくりゆっくりと秋津島公の前に歩いて行く。

何百人という花冠の間を見事なまでに堂々と背筋を伸ばして。

あまたの花冠に混じって、制服で参加している俺たちは、姉ちゃんの家族として招かれているものだ。

姉ちゃんのプロフィールはざっと流れているので、皆は制服姿の俺たちがいてもいぶかしむことはない。

そして、俺の親友の柚月羽鳥の母親である山吹女爵が扇を持って、保護者のように傍にいてくれた。

一言で言うと、女傑。

元々は自分で商売をしていたのだが、目覚しい功績を立てたことで叙爵された身だ。

そういう花冠は、基本的に＜四神＞の色ではない色を纏うことが多いらしい。

ちなみに花冠になってもすることは変わらないわ、と未だに社長業と兼任しているらしい：土地を持たない皇都花冠だからできる技だ。

「ごめんなさいね、本当なら君たちはもっと近くにいてもいいんだけど、私はこのポジションだから。かと言って、あまり知らない華族のところも落ち着かないでしょう？」

「いえ、お気遣いなく。女爵がいて下さるだけでも心強いです。俺たち、本当に作法も知らないし：俺たちが失敗すると、姉ちゃんに迷惑かかるから」

気を使ってくれる羽鳥のお母さんに申し訳なくて、慌てて首を横に振ると、ふふふと笑われる。

「茜伯爵、か。「剣の色は茜色」と言われる公の剣にして、公の唯一の部下と言われる方がまさか息子の友人の姉だとは、世界って狭いわねえ」

確かに。ついでに親友の母親が花冠ってのもレアケースだと思う。

「見て、茜伯を迎えるために公爵殿下が玉座からお立ちになるわ」

これ以上はないほど優雅に玉座から降りた秋津島公が、ドレスの裾をつまんで深く礼をした姉ちゃんに近寄って声をかける。

茜伯爵の即位式 02

「ずいぶん長い間：本当に待ちかねたぞ、我が花よ」

「お待たせいたしましたして申し訳ございません、我が主。我が君が剣となりし為、やって参りました」

儀礼に則ったやりとりだけど、秋津島公の言葉には重みがある。

秋津島公は、姉ちゃんを十年も待ち続けたのだ。

普段は華族であろうと：そう、たとえ＜四神＞であろうと、秋津島公が玉座を立つことはない。

秋津島公にとって、茜伯爵はそれだけ大事な存在なのだと今の俺たちは知っている。

茜伯が存在するかしないかは、秋津島公にとってかなり大事なことらしいのだ。

そして多分、後ろの高御座にいる＜皇＞にとっても。

「そなたを得て、我が治世はより一層安定しようぞ。そなたの存在そのものが、妾にとっての幸いなれば」

「我が君にとって、更に幸いとなるように励みましよう。何事も公のよろしきように」

リィィィン、と鈴のような音が響くと、姉ちゃんと秋津島公の下に魔法陣が現れる。

＜契約の陣＞は、神官の色である白と司法官の色である黒。

秋津島公と交わす誓約は、神との契約だ。

そして契約とは法に従うこと。

司法官を束ねる玄武候の黒檜扇がぱらり、と開き、神官を束ねる白虎候の白檀扇が逆に閉じると、姉ちゃんたちが輝き出す。

「汝、桐生雅に伯爵位を与える。伯の花は三千遡りし古来より茜なり。これよりは茜伯を名乗り、朱雀の地に封じるものなり。異議なしや？」

「御意」

「これより我が傍に侍り、我が身を守ってたもれ、我が茜。すべての茜伯が秋津島公を守ったように」

「我が身が朽ち果てようとも、御身が信頼を裏切らぬことを誓いましょうぞ。我が剣にかけて」

ドレスに相応しくない帯剣した姉ちゃんがスラリ、と剣を抜く。
紅花流では実践的な剣術も教えているから、様になっている。

でもそれを受け取った秋津島公の次の動きに、俺たちは息を呑んだ。

「――――！！！！」

姉ちゃんが秋津島公に刺されたからだ。

けれど良くみたら、花冠は顔色一つ変えていないし、＜四神＞の方々にいたっては微笑ましそうに見ているだけ。

そうでなかったら、俺達は陽花と夕鶴に抑えた口で自分たちを抑えていただろう。

ついでに俺たちを抑えてくれた山吹女爵の手を振り払って近寄っていたかも知れない。

見ていると、姉ちゃんの背中から突き出した剣の色が一瞬だけ藤

色に染まって、剣ごと姉ちゃんの身体に消えてしまう。

茜伯爵の即位式 03

「汝の心が汝の剣、汝の身体が剣の鞘。望めば、いつでも汝のために現れようぞ、我が茜」

その言葉を合図に、俺たちの後ろに控えていた近衛隊の面々が、俺達の前に出てくると二列縦隊で姉ちゃんの後ろにひざまづいた。軍隊だけあって一糸乱れない整列っぷりは見事の一言だ。

しかもいつもの軍服じゃなくて儀礼用の軍服だから、綺羅綺羅しくて格好いい。これを見たら、きっと入隊殺到すると思う。

「そして共に、妾が預かっていた近衛が50。これを汝に返そうぞ、我が茜。これは汝が近衛^{このえ}。朱雀が率いるものと違い、汝の声でのみ動く茜のもの。これを手足とし、我が身を守ってたもれ」

基本の軍隊は朱雀候が束ねるものだけど、これは姉ちゃんが持つ近衛隊：つまり姉ちゃん^{このえ}は怖いことを言えば、クーデターを起こせる部隊を持った。

自分の喉元に刃を突きつけるような真似をする、これが秋津島公の信頼。

それがわかったのだろう、姉ちゃんは俺たちにわかる程度の「ホント、そんなバカなことしなくてもいいのに」と言いたげに一瞬だけ肩を竦めた後、また深く腰を折った。

「畏まりました、我が君」

そして立ち上がると、姉ちゃんが近衛隊に振り返る。胸を張って、それが当たり前のごとく威圧的に。

たった16歳の少女なのに、これからは部隊の長としても振舞わなきゃならないのだ。

「本日より、汝等は我が支配下に入る。我が命令には絶対服従を申し付ける。逆らうこと相成らぬ。良いな？公の御為に我に忠節を捧げよ」

「はっ！」

そしてまた姉ちゃんが秋津島公に向き直ると、深く深く頭を下げる。

「我が存在が我が主にとっての幸いなれば、この血の最後の一滴までを御身のために。我が忠誠、我が命、我がすべてを我が君、秋津島公爵殿下へ永久に捧げること、お許し下さいませ」

「許す。妾が世界に還るその日まで、そなたは妾のものだ、茜よ」
「御意」

またリイイイイン、と鈴の音のような音がして、玄武候の扇が閉じると、白虎候の扇が開き、静かにパチン、と閉じる。

それと同時に姉ちゃんたちを取り囲んでいた魔法陣も消えた。

一一一一一姉ちゃんが名実共に茜伯になった瞬間。

いつか俺たちも、あのように秋津島公とく皇の前に立つだろう。その時にきちんと出来るだろうか？

そう遠くないその時に、俺と美夜は国にすべてを捧げる覚悟が出来ているだろうか？

そして、俺たちは姉ちゃんを支えることが出来るだろうか？

猶予は最大6年。

その長くも短い時間の間に、俺たちは覚悟を決め、この場になければならない。

俺と美夜は、姉ちゃんの迷いのない後姿を見ながら、姉ちゃんに飛びつきたくてうずうずしているチビ二人を抱き上げて、そっと目を見交わした。

今から俺が話すのは、そんな姉ちゃんが、そして俺たちが花冠の一員になる少し前の話。

茜伯爵の即位式 03 (後書き)

ようやくプロローグ終了。次回からほのぼの(?) 本編です。

家族の肖像 01

「ただいまー」

いつものように学校から帰ってくると、しーっ、と美夜が口に手を当てて玄関にやって来る。

「柚月、お帰り。静かにしてちょうだい」

「どうしたんだよ」

「今、お客様が来てるのよ」

誰の？

うち（桐生家）に客なんて、珍しいにもほどがある。

「姉さんのお客様よ」

俺たちがいつも座るダイニングキッチンのテーブルには、姉ちゃんと向かい合って：見たことのない大人が二人、席に着いている。ぴしっとスーツを着こなした大人をここで見るのは珍しいことだ。とりあえず、キッチンを通らないと部屋にいけないから、挨拶をしておく。

俺たちがすっかりしないと、姉ちゃんの躰が悪いと言われるし、これだから親なし子はいわれてしまう。それ、結構腹立つのだ。親がいないのは俺たちのせいじゃないのに！

逆にさ、そういうことをいう大人の品性を疑うぜ。人間、一瞬で品格がわかるなら就職や学業上の人間関係の苦労なんてしないっての！！

だから、多分俺たち家族は…よその家の子供よりも礼儀にはうる

さいと思う。

「いらっしゃいませ。どうぞゆっくりしていつて下さい」

「上から二番目、長男の柚月です」

俺がぺこりと頭を下げると、雅姉が説明する……お役人かな？

前に雅姉が補助金上乘せしてもらう時にも来たんだよな、こんな大人たちが。

（こんなに細くて折れそうなほどに小さい身体なのに、もう師範なのか…）

（なんと素晴らしい才能の持ち主だ。本当に将来が楽しみですな）

（もうこれは、紅花流の至宝だよ。この年でこのレベルなら、将来どうなることか…ああ楽しみだね）

（きつと君なら、師範代もすぐ取れることだろう。ぜひ頑張ってくれたまえよ）

姉ちゃんを取り囲んで褒めまくりつつ、期待に満ちまくった目になにやら頷いていたそいつらがあまりにも不気味で、俺と美夜は部屋の中で掃除機とほうき持って、そいつらが姉ちゃんに手を出そうとしたらぶん殴る気で待機していた。だって…変態は滅んでもいいんだよな!?

ちなみに姉ちゃんの手をぶんぶん握って笑顔で帰っていった役人たちに、何かされなかったかと姉ちゃんに聞いたら、何かしたら血祭りになるのは向こうよ、と笑って言う姉ちゃんに、俺たちは感動したものだ。

そこ違うといわれそうだけど…俺たちにとって姉ちゃんは、それくらい大事で強くて立派な人なのだ。2つしか違わないけど。

ちなみに当時姉ちゃんが10歳、俺たちが8歳の時の話だ。

そして秋津島で最も標高の高い高麗山から帰って来た時、姉ちゃんは13歳になっていた。俺と美夜で不器用ながら「お誕生日おめでとう」ケーキ作って待っていたから間違いない。

姉ちゃんがいらない二週間の間に、俺と美夜は最悪の事態だって考えた。

葬式するとなったら葬式代はどれくらいかかるのかとか、俺と美夜でチビたちを守ることはできるのかとか。

まだ11歳の身にはわからないことだらけで：まあ、今だってわかってるわけじゃないけど、それでも必死で考えた。

姉を失うこと前提の考えは残酷だというかも知れないが、俺たちは何があっても生きて行かなきゃいけないんだ。楽観的に生きていけなかった以上、最悪は想定して動くべきだと今でも考えている。

だから俺は基本、悲観主義で常に最悪を考えている。楽観的なのは美夜に任せていればいい。

役割分担しておけば、何があってもそこそこ耐えられるだろう：杞憂で済めば、それに越したことはないし。

面倒見が良いと言われるのだって、姉ちゃんを見て育ったせいだと断言できる。

それに俺は、姉ちゃんがいらない間は全員を守らなきゃいけないんだから、そう思えばおのずと、そういう態度にもなるのだろう。

だから俺は家族以外は、そう簡単に信用しない。

一度信用したら、裏切られても殺されても構わないくらいの覚悟で人を見ている。

姉ちゃんの優しさと甘さは美德だ、それを潰すなんて絶対にしたくない。

俺が取りこぼした分を拾えれば、結果オーライだ。

家族の肖像 02

「「お邪魔しています」」

大人たちも俺に向けて軽く笑顔で会釈してくれる辺り、感じは悪くない。

前の変態っぽかった役人とは、一味違う品の良さが感じられる。いや、前の役人たちも悪くはなかったんだけど、変態っぽい態度があまりにもマイナスすぎたんだ。

子供心にドン引きさせるなんて、やっぱり大人としてはダメだろう。

（どこの部署だろう：なんていうか、芯が通ってるな）

目の前にコーヒーの湯気が立っているのは、美夜が入れてくれたんだろう。こいつ、そういうの抜け目ないから。

今まで見た大人と違い、仕事に誇りと品性を持つてる感じの大人にちよつと興味が沸いた。

「美夜、柚月。悪いけど、もし夕鶴と陽花が帰ってきたら、部屋で遊ばせておいて。お客様が来てるんだから、騒がしくしちゃ悪いわ」「いえ、お構いなく。我らも用件が済めば、すぐに退散いたしますので」

そりゃそうだ、もうすぐ夕飯の時間だもんな：しかして姉ちゃんと話したかったら、この時間帯か夜しか無理だし。

「ごゆっくりどうぞ。姉さん、用事があったら遠慮なく呼んでちょうだいね」

にっこり笑顔で美夜が俺の腕を引っ張って部屋に戻ると、一度も使われたことのない内線電話を手取る。

「…なに、それ」

「姉さんのところの内線、受話器上げておいたのよ。大きな声立えないで」

「それって…盗み聞きって言うんじゃない」

途端に美夜の拳が俺の頭に落ちてくる。

「姉さんに何かあったら困るでしょ！これは正当な権利よ！」

そうかい？

ただ単に面白おかしくしたいんじゃないの、と言いたかった俺だったが、やってきた相手を聞いて、絶句した。

「…マジで？」

「そうよ。幾らお姉ちゃんが優秀な師範代だからって、それだけで皇宮からお役人が来るとは思えないのよ。きっとあの軍事訓練に何か関係があるんだわ！」

皇宮＜星麗宮＞の侍従たちが来るなんて、何があったんだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3747ba/>

花鳥風月～茜は夢の道標～

2012年1月13日06時50分発行